

30歳を目前にしたころ、自分が本当にやりたいことは何なのか悩む日々が続きました。広告代理店のデザイナーとしてお気軽に、なにに不自由な生活を過ごしていたのですが、なにか納得できなかったのです。結局、答えは「絵描きになろう、絵を描いて生きてゆこう」だったのです。といつても食べてゆけるあてはなにもないし、どちらかというと危なげな人生の決断でした。できれば海外に出かけようと思案、結局、フラメンコにシェリー酒、黒い瞳の美女がいるスペイン、それも南のアンダルシア地方が陽気で人間模様が濃く絵になりそうだし、自分に合っていそうなので、セビリアに行くことに決めました。

お金を貯め、ようやく出発できたのは32歳の春、1975年のことでした。この年、ベトナム戦争が終結し、スペインではまだフランコ總統が健在でした。

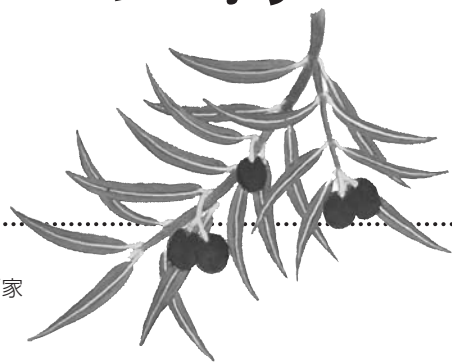
セビリアの郊外、オリブ畑のなかにある一軒家に落ち着き、充実した日々を過ごしていましたが、問題発生、当然ながら一年も経つと生活費が乏しくなってきたのです。カメラから帰路の航空券まで売り、どうにか凌いでいましたが、とうとうお金も持ち物も底をついてしまいました、でも好きになったスペインを離れたくない、祭りの物語はここから始まりました。

時はヒッピー文化華やかなりし頃、繁華街では世界各国から旅をしてきた若者たちが俄か露天商になり、インドやモロッコなどで手に入れた小物を売り、稼ぎながらヒッチハイクをし、

まつりが育む地域の力

フェレイローラ村の夏祭り

石井 崇 • Written by Takashi Ishii 画家



次の街へと流れていくのがお洒落な旅姿でした。私も彼らと同じように見よう見真似で針金細工を始め、ピアスやネックレスを作り、白いキャンパスのうえに怪しげな品々を並べて売り始めたのです。それが大当たり、次から次へと売れ、そこで再びお金を貯め、じつくりとアンダルシアの情景を描こうと決心したのでした。

スペインはカトリック教の国、どこの街にも守護神がいて、その命日には盛大なお祭りをします。その聖人は千差万別、ということとは、毎週どこかで祭りがあることになる、特に夏の祭りは帰省客で大賑わい、夜遅くまで人が溢れて活気づくのです。セビリアの春祭り、サラゴザのピラールの祭り、バレンシアの火祭り、都会から村々まで、ありとあらゆる祭りを廻って商いをしていました。

ほとんどの祭りが宗教儀式で幕を開け、後はほぼ一週間、それこそドンチャン騒ぎになるのです。儀式とは、守護神を御輿に載せ街を練り歩くのが一般的、先頭には市長さんやら長たち、老若男女と共にブラスバンドを従え行進、まあ、聖人様に街の様子を見ていただき、お清めをしていただくのです。厳肅なる儀式は初日だけ、次の日からは無礼講、ロックバンドや有名歌手も出演、鳴り物入りで夜つき飲み、踊り、歌い明かすのです。アンダルシア地方の女性は色鮮やかなフラメンコ衣装で着飾り、セビジャーナスを輪になって踊ります、華やかで祭りが輝いて見えます。

大きな街になると一夜城の如く遊園地が出

現し、メリーゴーランドや射的屋、仮設居酒屋が並び、物売りが隙間なく店を並べる、私はその仲間として、祭りを追いかけてながら寅さんの稼業を続けたのでした。おかげで4年ほどの苦労の末、その後5年間、稼ぎを食い潰しながら絵を描くことができたのでした。

スペインに渡って10年間、一枚の絵も売れずに、それでも絵を描き続けたのですが、神様は見捨てませんでした。多くの方々のご支援で絵も売れ始め、本まで出版するようになりました。有難いことです。

そして数年後、山あいの小さなフェレイローラ村の生活が始まったのでした。村のある地域はアルプハール地方と呼ばれ、グラナダの三千m級の山々が連なるシエラネバダ山脈の南面に



雌狐の埋葬は重々しく、それでいてユーモアたっぷりに演じられる
(55ページ参照)

あり、小さな白い村々が散りばめられ、スペインでは有名な生ハムの産地でもあります。私もこの生ハムの取材のため訪れたのですが、雪解け水のおかげで豊富な水量の泉が村々にあります。偶然、立ち寄ったフェレイローラ村では弱酸性の炭酸水が自噴している泉をみつけ、どうしてもこの村に住もうと決心したのでした。家を買うほどの資金はなかったのですが、友人たちからお金を借り集め、どうにか古い田舎家を手に入れ、村の住人になったのです。

村人30数名、それも半分以上が外国人、なんとも寂しそうな集落なのですが、バルもあり、収容人数20名ほどのペンションもあれば、音楽学校まである、とてもユニークな村なのです。スペイン市民戦争が起きた30年代までは村民数百人、独自の村役場や小学校まであった立派な村でしたが、山間部の農業では食べていくことが難しくなり、第二次世界大戦後、復興景気に沸く先進国に出稼ぎにいったのでした。当時、国民の10人に1人の割合で国外に出ていったのですから、もう社会現象といえます。フェレイローラ村の住民は誰もがドイツへ出稼ぎに行きました。しかし、ヨーロッパの経済が落ち着いてくると村に戻ってくる元村人も見受けるようになったのですが、ほとんどはバルセロナやグラナダなどの都会に移住してしまいました…。

出稼ぎ先で村人たちが故郷の良さを話したのでしよう、時代が変わり、今度は過疎化した村に外国人たちがやってきました。我家のお

隣は音楽学校の先生でイギリス人の女性、食事をよく一緒にするイタリア人とデンマーク人の夫婦はペンションを営んでおり、石油掘削エンジニアとテレビ局に働くドイツ人夫婦は優雅に田舎暮らしを楽しんでいます。今では村人の半数が異邦人、いつてみれば国際村となって再生したのでした、何せ東洋人の私まで住んでいますからね。

8月下旬、フェレイローラ村の守護神サンタ



オリーブ畑とポプラの大木に囲まれたフェレイローラ村

クルスのお祭りが始まります。本来サンタクルスの命日は6月なのですが、夏休みに帰郷する元村人たちのために日程を変えているのです。

村の広場には古い教会があるのはどこの街でも同じ、少し違うのは24時間、水が流れる泉があり、ロバや羊たちでも飲めるように水飲み場が二段式になっていること、そして今は使われていませんが共同洗濯場が隣接してあること、すべては豊かな水のおかげです。

その広場に祭りの期間中、仮設舞台と組み立て式居酒屋が用意される。街路樹と教会を結んで電飾が吊るされ、村の入り口や通りにはシェリー酒の広告入り小旗や万国旗が飾られます。こんな準備が整うころには村の人口は一気に1000人を超え、待ちきれない若者たちは、できたばかりのカウンターに肘をつき地酒コスタを飲み始めます。1年ぶりに再会する友人や家族もいるのだ、祭りの前からもう賑やかになり、隣村の住人も参加し、気分はじわじわと盛り上がってゆく。

この日のために村の長たちは各家庭を廻って寄付を仰ぎます。大家族や外国人は1万円ほどの喜捨をしますが、村の生活費を考えればかなりの金額になります。この予算のなかから祭りの目玉、大パエージャ大会の食材代、打ち上げ花火代、ブラスバンドやロックバンドへの支払い、朝のドーナツ代、仕上げのバーベキュー代などすべてを賄います。村の意地がかかっていますから、皆さん大いに奮発するのです。

祭りの当日、普段は閉じたままの教会の大扉が開き、安置されている守護神サンタクルスが御輿に載せられ、村の長たちに担がれ広

場にお出ましになる。ブラスバンドが国歌を演奏、と同時に花火が盛大に打ち上げられる。

「ビバ、サンタクルス！」

まあ、万歳というところでしよう、司祭と長たちを先頭に、正装した村人を従えて村を練り歩く、これが祭りの華であり始まりの合図なのです。

守護神が教会にお戻りになり、

扉が閉まれば宗教儀式は終わりになります。

その日の夜からはエネルギー爆発、村人たちの祭典が始まり佳境に入ります。舞台ではロックバンドがアンプの調整に余念がない、居酒屋には何重にも輪が広がり、皆さん挨拶の抱擁と頬へのキスが続く。まあ、4日間、同じ故郷を持つ仲間たちの饗宴が繰り広げられるのです。

地酒コスタの酔いがしみ渡るころ、ロックバンドに火がつき、けたたましい音量で歌とギターにシンセサイザーが鳴り響く、それも朝方の5時まで続くのです。ブラスバンドも大太鼓にシンバル、トランペットを吹き鳴らし、朝の3時ごろまで村中を行進します。こうなると、「祭りだ、寝ている暇はないぞー！」というこたらしい、凄いパワーですね。さすがラテン民族ということでしょう。

次の朝は打って変わって静寂な広場、路に飾られた小旗だけがヒラヒラと揺れています。



バンドブレは誰でもが踊れるリズム



「それであの娘は結婚したのかい」お話の内容はどこも同じ

昼ごろ、ご苦労さんということでお手製のドーナツに甘いココアが振舞われます。若者たちは眠そうな表情で現れ、祭りの2日目が始まるのです。その日も明け方まで精力的に飲み踊り狂います。

そして、3日目皆さん待望の大パエージャ大会、このあたりの村々では有名な祭りの目玉、ほとんどの村の祭りが豚のリブやイワシの炭火焼と、代わり映えしないなかで、唯一の大ご馳走なので千客万来、その日は400人ほどの来客で村が溢れかえります。

大鍋には米だけでも40キロ、オリーブ油10リットル、鶏肉なら十数羽分と使う食材のスケールが違う。トマトやタマネギの量も半端でない、女性陣が朝早くから微塵切りを作りいくつものバケツが一杯になる。長たちは盛大に薪を燃やし大量の置き火を作る、暑い夏の炎天下での作業は見えていても大変です。村の広場には、テーブルと椅子を持ち出し、飲み



長になりたてのファンは汗だくで焦げないようにかき混ぜる

ながら笑いをまじえて近況報告、ゆつくりと出来上りを待つのです。

「パエージャができましたよ！」

長のひとことで皆さん、お皿を持って並び始めます。

「オマエはハポネス、お米を沢山食べるらしいな」
毎度のことなのですが、少し多めにくださるのが慣わしになっています。この日は村の住人や元住人、客人や観光客たちにも無償で振舞われます。皆が一緒になって、それこそ同じ釜の飯を食べるのが昔からの習いなのです。祭りはこれで終わりません、やはりフェレイローラ村ならではの「雌狐の埋葬」の遊びが4日目におこなわれます。

このあたりは狐が多く、羊や鶏を襲ったり悪さが絶えませんでした。そのため、昔は雌狐

を捕まえ皮を剥ぎ、そのなかに花火を詰めて御輿に載せて担ぎ、子供たちが行列をし、司祭役の若者が怪しげな呪文を唱えながら村を一周。さすがに今は残酷だということで、張りぼての手作り狐に花火を詰めますが、最後は広場の真ん中に置き、導火線に火をつけて大爆発させるのです。危険な行事だということですが、公式には禁止されているのですが、この村ではまだまだ続いています。

そして最後の5日目、若者たちが村人や観光客、誰にでもおかまいなく泉の水をかけ合い、祭りの余韻を味わいます。その日の夜、やはりしめは豚のリブによる炭火焼バーベキューになります。村人たち内輪のご苦労さん会、夏祭りの行事はこれで一件落着、帰郷していた元村人たちは胸を郷愁の念でいっぱいに満たし、都会へと戻ってゆくのです。

一度は限界過疎化した南スペインの小さな村が、祭りの発熱現象によって復活されたといってもよいでしょう。

村の構造は広場と教会を中心に家並みが囲み、あたかも城郭都市のようになっていきます、戦の多かった歴史がそうさせているのです。

村人は運命共同体。

村の存続は信仰によって、血の結束によって、次の世代へと祭りとともに継続されてゆくのです。客人には最大限のもてなしをするのも、8世紀間イスラム教国だった過去の遺産、日常の理であるのです。見事に一つひとつ



村のサンタクルス聖人は、花に飾られ広場にお出ましになる

の種明かしが4日間の祭りのなかに凝縮され、その証しになっています。

4年に及ぶ祭り廻りの寅さん稼業がもたらしたスペイン田舎暮らし、そして今、絵描き人生を享受させていただいています。

村のランドマーク、サンタクルス教会の鐘楼がある限り、フェレイローラ村は不滅であり、私は村人として生きてゆけるのです。

CEL

石井 崇・イシイタカシ

● ● ●

画家。1942年東京生まれ。65年東京芸術大学工芸科卒業後、マツキャンエリクソン博報堂入社。75年単身スペインに渡り、セビリア郊外に10年間滞在し、89年よりフェレイローラ村にアトリエを構える。現在、スペインと日本を行き来しながら活動を展開。主な著書は、『TAKASHI ISHII-LA FELICIDAD DE CADA DIA』（求龍堂）、『南スペイン、白い村の陽だまりから』（東京書籍）など。